

「食」から迫る戦後史学習 —高等学校・地理歴史科「日本史 A」における試み—

Learning about Contemporary Japanese History using food in High school

中 野 悠*・小 瑠 史 朗**
Yu NAKANO, Fumiaki KODAMA

【要旨】

本稿は、2022年度12月から2023年 1 月にかけて青森県立柏木農業高等学校の 3 年生を対象に選択科目「日本史 A」のなかで実施した戦後史学習の成果を報告するものである。本実践では、近年の歴史教育研究で提起されている「レリバンス」論との接続を意識して「食」をテーマにした授業開発を進め、祖父母・父母世代への聞き取り調査を組み入れた学習を組織した。その結果、歴史への関心を高め、各時期の歴史的状況への具体的かつ実感的な理解を深めるうえでは一定の効果が得られたものの、今日の「食」をめぐる状況を批判的に捉えるまでには至らず、この点に課題が残った。

1. 問題の所在

近年、歴史教育では「レリバンス」をキーワードに据えた研究の潮流が生まれている。学習の「有意性」や「関連性」などを意味するこの用語は、2017年～2019年に実施された学習指導要領の改訂を契機に広く関心を集めるようになった。すなわち、今次の学習指導要領の改訂に際しては、資質・能力の 3 つの柱として「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度・人間性等」が示され、これら 3 要素が独立的に存在するのではなく相互に関連しあうことが強調されたが、特に「主体的に学習に取り組む態度・人間性等」を頂点に配置し、他の二つの要素をその下部に位置づける三角形の構造図が提示されることとなった。その際、「主体的に学習に取り組む態度・人間性等」には「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という文言が添えられ、教科で育む「知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力等」を実社会や人生のなかで活用する方向性が鮮明に提示されることとなった。このような「学力」の構想のもとで、教科教育研究においても実社会・実生活との接点を確保することや学習者が学ぶ意義・意味を見いだすことの重要性が広く認識されるようになってきている。

この「レリバンス」に基づく授業改革は多様な教科領域で進められてきているが、ひととき強い関心が注がれてきたのが高等学校の地理歴史科に必修科目として新設された「歴史総合」である。今次の学習指導要領改訂において高等学校・地理歴史科は全ての選択科目が刷新され、必修科目として「歴史総合」と「地理総合」、選択科目として「日本史探求」「世界史探求」「地理探求」が新設されることとなった。このうち「歴史総合」は近現代の日本史と世界史を融合した点に加え、日常生活や現代社会との接点を重視している点が注目を集めている。その内容構成をみると、大項目として「A 歴史の扉」「B 近代化と私たち」「C 国際秩序の変化や大衆化と私たち」「D グローバル化と私たち」が設置されており、近現代の歴史的過程を「私たち」と関連づけて学ぶことが明確化されている。このように歴史教育でも新設された「歴史総合」を実りある科目として展開しようとする関心を軸にしながら歴史教育においてもレリバンスを重視する機運が高まっており、そのモデルを欧米諸国に求める動きが活発化している¹⁾。

歴史教育をめぐる以上のような状況を踏まえ、本論文はレリバンスを重視した歴史授業のあり方を実践的

* 青森県立柏木農業高校 Kashiwagi Agricultural High School

** 弘前大学教育学部社会科教育講座 Department of Social Studies Education, Hirosaki University

に考究するための手がかりとして、2022年12月から2023年1月にかけて青森県立柏木農業高校の3年生を対象に実施した戦後史学習の成果を報告するものである。「歴史総合」は2022年度入学生から漸次実施されているが、今回は科目担当の都合により「日本史A」での取り組みとなった。その際、戦後史を現在の自分と関連づけて学ぶための視点として「食」に着目して授業開発を進めることにした。「食」に着目した理由は、以下の3点である。

1点目は、「歴史と現在」の往還を円滑化するとともに、自分自身の生活との関連づけを図りやすい素材であると考えたからである。先述した歴史教育におけるレリバンズ研究においては、レリバンズを「社会的レリバンズ」と「個人的レリバンズ」に区分する視座が提起されており、このうち現在の自己との関わりを問う「個人的レリバンズ」に関する取り組みが遅れていることが指摘されている²⁾。この区分に基づく「食」は学習者個々の生活と密接にかかわる点で個人的レリバンズに位置づけることができる。「食」を窓にして歴史を眺めることで、過去の営みと現在の自己の生活を対比的に考察する回路を拓くことができると考えた。

2点目は、人々の生活経験に迫ることができ、特に祖父母・父母世代の経験を組み込むことができると考えたからである。戦後史の学習内容は、敗戦後の民主化改革や冷戦構造などを扱うこととも関係して、国家的な視点から歴史事象に迫る場面が多く、学習者にとっては他の時代以上に身近に感じにくい面を持っている。その一方、戦後史は歴史学習のなかでは、現存する世代の経験を媒介にして学びを深めることができる稀有な領域である。こうした特質を備える戦後史学習のなかに「食」の視点を組み込むことで、人々の生活領域にアプローチすることが可能となり、また祖父母・父母世代の生活経験を交えながら同時代の社会変化をよりリアルに捉えることができると考えた。

3点目は、今回の授業実践の対象が農業高校の生徒たちであったからである。生徒たちは普段から農業を媒介にして「食」について学ぶ機会が多いが、これまで歴史的側面から「食」を見つめ直す機会はなく、新たな気づきを得られるのではないかと考えた。レリバンズのある戦後史の学びを構想するに際して、「恋愛」や「教育」、「旅行」などのテーマも検討したものの、学校全体のカリキュラムや生徒たちの進路等との関連を考慮すると、「食」が最も適切な題材であるという結論に至った。

このような問題関心のもとで「食」に視点を置く戦後史学習の授業開発に取り組み、2022年12月半ばから2023年1月にかけて計3時間の授業を実践した。以下、開発した授業を提示し、その成果と課題について検討を進めていく。はじめに実践の舞台となった青森県立柏木農業高校の概況を簡潔に紹介したうえで、開発した授業前に実施したアンケート調査の結果から生徒たちの食生活の実態と「食」への関心を検討する。次に、授業の全体像を提示するとともに、具体的な指導過程と生徒たちの学習の様子について説明する。最後に、授業内で生徒たちが示した反応などを手がかりにしながら、本実践の成果及び課題について考察したい。

2. 生徒たちの食生活の実態と「食」への関心

2-1 実践校の概要

本実践は青森県立柏木農業高等学校の地理歴史科「日本史A」を履修する3年生を対象に実施した。本校は青森県平川市に所在しており、在籍する生徒の大半が平川市内および隣接する弘前市、黒石市などに居住している。1926年に農学校として創立されて以来、地域農業の担い手を養成する役割を担い、農業分野で活躍する多くの卒業生を輩出してきた。近年では、国際的な視野を備えた農業従事者を育成する観点から国際交流活動を積極的に推進しており、本校で生産したりんごや米、りんごジュース・ジャムなどの加工品を香港や台湾、シンガポールに輸出する取り組みなどを進めている。他方、農業以外の分野で活躍する人材育成も進めているほか、少子化に伴う生徒数の減少を背景に、2022年度から青森県外から生徒を募集する全国募集の導入校に指定されている。

本校は生物生産科、環境工学科、食品科学科、生活科学科の4学科から構成されているが、本実践は食品科学科26名（男子16名・女子10名）および生活科学科23名（男子2名・女子21名）の合計49名を対象に実施した。両学科では1年次から「食」に関連する多くの授業を履修してきており、衛生管理や栄養などについての学習経験を重ねてきた。卒業後の進路も調理や栄養を学ぶために大学や専門学校に進学する者や、青森県内の食品会社に就職する生徒が多くみられる。今回の生徒たちは学習指導要領改訂前の旧カリキュラムの対象者であったため、1年次に公民科「現代社会」、2年次に地理歴史科「世界史A」、そして3年次に「日

本史A」を履修してきた。この「日本史A」の2学期期末考査の後、冬期休業を挟んで3時間を割いて「食」を基軸にした戦後史の学習に取り組むことにした。

2-2 アンケート調査の結果

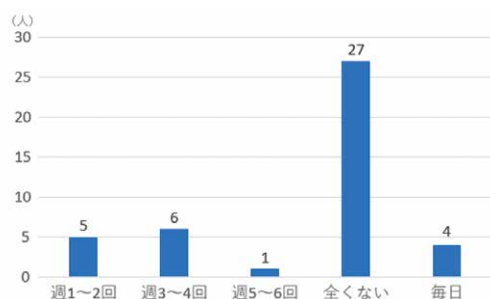
本実践に先立ち、生徒たちが普段どのような食生活を送っているのか、また「食」に対してどのような関心を持っているのかを把握するため、アンケート調査を実施した。回答が得られたのは全49人中、43人であった。質問事項は、食事の形態や外食・インスタント食品などの利用頻度、食事に際して気にしていること、自分自身の食生活への評価などを問うた。

このうち、資料1および資料2は家族そろって食事する頻度を問うた質問への回答結果である。朝食については、毎日家族そろって食べると回答した生徒は5人、「まったくない」と回答した生徒が27名であった。夕食については、「毎日」と回答した生徒は13名、「まったくない」が9名という結果が示された。この結果から家族がそろって一緒に食事をする営みが、必ずしも標準的な形態となっていないことが浮き彫りになった。また、外食については、生徒の44.1% (19名) が週に1回は外食で済ませ、コンビニ弁当、惣菜パンや冷凍食品などのいわゆるインスタント食品については、5割から6割ほどの生徒が週に一度は口にしている結果が得られた。

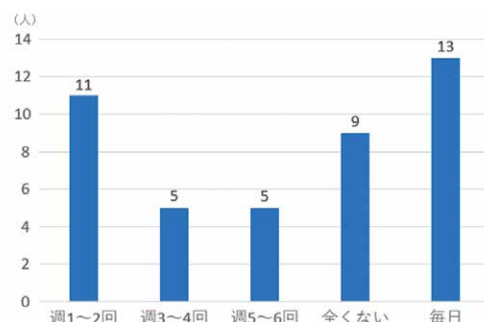
他方、「食事をする際に、気にしていることは何ですか」(複数回答可) という項目については、資料3のような結果が示された。これをみると生徒たちの「食」への関心が「味」や「量」、「価格」、あるいは「栄養バランス」、「カロリー」、「安全性」などに向けられる一方、産地や生産・調理過程への関心が低いことが判明した。生徒たちの「食」への関心は「個」の感覚のレベルに閉じる傾向があり、その視野を他者や社会に広げるまでには至っていないことがうかがえた。

以上のような食生活の実態と関心が示されたが、生徒たちに「自身の食生活をどう評価していますか」と問うたところ、「まったく問題ない」と回答した生徒が30.2% (13名)、「少し問題はあるが、おおむね良い」と回答した生徒が39.5% (17名) となり、約7割の生徒が現状の食生活に満足していることが明らかとなった。他方、「問題があり改善したい」と回答した生徒は25.6% (11名) であったが、「食事にどんな問題があるか」を問うたところ、「ジャンク・フードの食べ過ぎ」「必要な栄養がとれていない」「朝食を抜くことがある」など、主として健康や栄養の偏りの面から問題点を指摘する傾向がみられた。このような結果からは、現在の食生活を批判的に問う視点が弱く、「食」をめぐる課題意識も個々人の健康・栄養面に集中している姿が浮かびあがった。

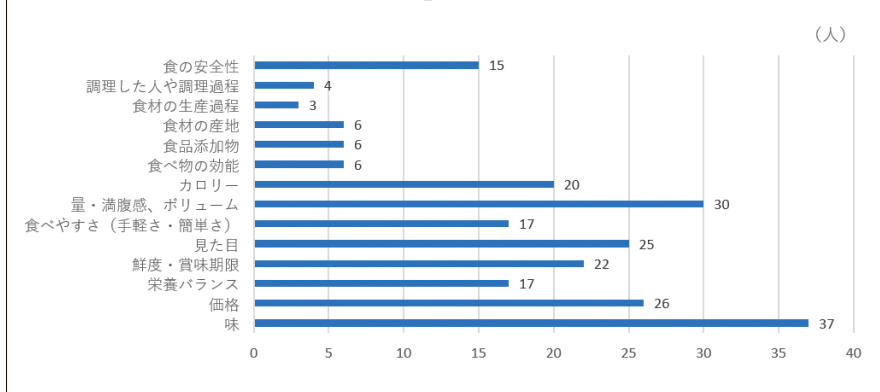
資料1 質問「1週間に家族全員がそろって食事をする機会は何回ありますか(朝食)」への回答結果



資料2 質問「1週間に家族全員がそろって食事をする機会は何回ありますか(夕食)」への回答結果



資料3 質問「あなたが食事をする際に気にすることはなんですか。あてはまることをすべて選んでください」に対する回答



3. 実践「“食”から迫る戦後史」

上記のアンケート調査の結果を踏まえ、本実践では以下の2つの目標を設定することにした。

- (1) 「食」を媒介にして歴史への関心を高めるとともに、「食」を個人的な営みとしてだけでなく社会的な営みとして捉えることができる。
- (2) 「食」を窓口にして敗戦後の日本社会の歩みと各時期の特徴を具体的に捉えるとともに、身近な人々の経験を参照しながら現在の食生活の特質と課題を歴史的かつ批判的に捉えることができる。

(1)の目標は、これまでの授業を通して歴史学習への関心が必ずしも高くなかったため、「食」を題材にすることで学習意欲を引き出すことを企図して設定した。加えて、事前アンケートでは「食」の社会的側面に対する関心が低かったことをうけて、まずは個人の経験を基盤にしながらレリバンスを確保するとともに、それを起点にしながら他者や社会に対する認識を拓くことを目指すことにした。他方、(2)の目標は、事前アンケートで現在の食生活に対する批判的認識が脆弱であったことを踏まえ、戦後の各段階における歴史的状況と対比しながら「食」をめぐる今日状況の特質と課題を捉えられるようになることを企図して設定した。その際、各時期の歴史的状況への理解をより具体的・実感的なものにし、今日との対比を円滑化するために親や保護者、地域の方々などの経験を意識的に取り入れることにした。

このような目標設定の下で、第2次世界大戦および戦後史の学習を終えたのち、12月末から「“食”から迫る戦後史」と題して3時間扱いの授業を計画した。このうち1時間目は年内最後の授業として実施し、特に「食」を問う視点を広げることを意図して実施した。そして、冬休み期間中に身近な人への聞き取り調査に取り組み、その成果を踏まえながら2時間目および3時間目に「食」をめぐる戦後史を学んでいった。3時間の学習指導過程は、資料4に整理した通りである。以下、各時間の概要について説明する。

1時間目は、既に学習を終えていた第二次世界大戦から敗戦と占領、高度経済成長に至る歴史過程を大まかに確認したうえで、「『食』という視点から眺めたとき、敗戦後の日本社会はどのような変化を遂げてきたのだろうか。望ましい変化を遂げてきたのか、それとも望ましくない方向に変化してきているのか。」と問いかけて授業を開始した。数名の生徒が敗戦直後の食糧不足を挙げたが、それ以外に「食」に関連する歴史的な出来事や社会変化に言及する生徒はいなかった。そこで、まずは現在の私たちの「食」との向き合い方を見つめ直すところから探求を始めることを提案し、「この1週間で一番記憶に残っている食事は？」と発問した。やや唐突な問いかけとなったようで記憶があやふやな生徒が多かったが、数名の生徒が直近の食事のメニューを思い出して発表した。この生徒の応答に対して「どこで食べたのか」「だれと食べたのか」と掘り下げ、何を食べたかだけではなく、どのような状況や環境で食べたかも重要な要素であることを指摘し、披露宴や旅先での食事などを例示した。また、「食べた記憶」だけではなく「食べられなかった記憶」もあることや、普段は食べたことのない素材を口にした経験なども記憶に残りやすいことを伝えた。

次に、「あなたにとって胃袋とは何ですか」「あなたは食べることで何を得ていますか」という二つの発問を投げかけた。この問いは、「食」を切り口にして近現代の日本社会の歴史過程を分析した湯澤規子の一連

資料4 3時間の学習指導過程の概要

時間	学習内容	生徒の活動	教師の活動と指導上の留意点
1 時間 目	○第2次世界大戦から敗戦、高度経済成長に至る過程についての復習	・戦後日本で「食」をめぐる起きた出来事や変化について知っていることを挙げる	・「食」はこれまでも、これから人間にとって不可欠な要素であることを確認する
	単元を貫く問い:戦後日本で「食」は望ましい方向に変化してきたのか		・特に本校は「食」に関わる仕事に携わる卒業生が多いことを想起させる
	質問1「ここ一週間のなかで一番食べている食事は？」を全体で共有	・個人で付箋に記入し、数名に発表してもらう	・食べたものだけではなく、食事の場所や形態、状況などにも注意を促す
	○質問2「あなたにとって胃袋とはなんですか」	・個人で付箋に記入する	・社会や他者との繋がりについては深く触れない
	○質問3「あなたは食べることでなにを得ていますか」を全体で共有	・グループごとに物質的な側面と、社会的側面の両面について考える	・「だれと食べるか」「結納」などを例示して社会的な側面についても考えさせる
2 時間 目	○質問4「あなたの思い入れのある食べ物について教えてください」	・個人で簡単な文章やイラストを添えて紙皿に記入した後、互いに共有する	・忘れられない味や思い出のなかにある食事風景などを想像させる。5W1Hを意識させる
	○まとめ:他者の発表を聞いての感想、振り返りをまとめる	・他者との共通点や相違点、驚いたことなどを記入する	・過去を生きた人々も「食」を抜きにして存在できなかったことを伝え、特に敗戦後の時代に「食」に対するどのような経験や記憶があり、現在まで変化してきたかを想起させて「冬休みの課題」を提示する
	○冬休みの課題 身近な人への聞き取り調査	・質問紙を読み、質問事項を確認する	
	○敗戦直後の食料事情について	・闇市、食料メーデーの動画を視聴して、ナレーターの下書きを穴埋めする	・戦災による物資不足や生産体制の乱れに加え、復員・引揚により人口が急増していたことを確認する
	学習課題:青森県でも敗戦直後に食糧不足が生じていたのだろうか？		
3 時間 目	○敗戦直後の青森県の食糧事情	・『月刊東奥』を読み、食糧事情が分かる箇所にマーカーを引く	・「青森県人を殺すな」「勤労大衆は瀕死の危機」「当面の実践的課題は食糧問題」といった文言に注目させる
	○青森県内の学校給食事情	・「学校給食10年のあゆみ」を読み、当時の「食」を考えるうえで重要だと思った箇所にマーカーを引く	・「給食実施率全国最下位6.7%」「保護者が栄養の重要性を認識していない」「学校給食を通して豊かな社会性をもった生徒を育てたい」といった文言に注目させる
	○「祖父母の記憶」から考える	・冬休みに取り組んだインタビュー調査のなかから祖父母世代の「小学校時代の給食」と「ごちそう」について全体で確認する	・ほとんどが「給食がなかった」と回答し、お弁当のおかずとして卵焼き、しとぎもちなどが、「ごちそう」については鯨肉カレー、おぼろ、煮しめ、白米、カツなどが挙げられたことを紹介する
	○まとめ(1)敗戦直後の食糧事情を漢字一文字で表し、その理由を記入しよう (2)祖父母からの聞き取りを踏まえ、現在の自分の食生活と比較して分かったことや気になったことを整理しよう		・現在との相違点、共通点、気になったこと、印象的だったことなどをまとめる
	○復習 高度経済成長期に普及した家電は？	・教科書で「三種の神器」と「3C」を確認する	・「三種の神器」が1950年代末から、「3C」が1960年代半ばごろから普及したことを伝える
3 時間 目	○冬休みの宿題 「画期的だと感じた調理家電は？」	・年長世代が挙げた画期的な調理家電とその理由を全体で共有する	・炊飯器、冷蔵庫、電子レンジを挙げる回答が多かったことを伝え、画期性を推察させる
	学習課題:調理家電はなぜ高度経済成長期に普及したのか。また、食のあり方はどのように変化したのだろうか？		・当時と現在の食のあり方は連続しているのか、それとも断絶しているのか、と問う
	○高度経済成長期の生活スタイル	・教科書から調理家電が普及したことに関係すると思う出来事を探す	・耐久消費財の大量生産体制、自営業の縮小と会社員の増大、女性の社会進出、核家族化などに注目する
	○食卓の様子は、どう変化したか？	・この時期の食生活の変化に関わる事項を教科書から読み取る	・洋風化とコメ消費の低下、冷凍食品の登場、外食の普及を取り上げ、その背景について考えさせる ・他方、核家族化が進むなかでテーブルでの「家族団らん」が定着し、「膳」や「ちゃぶ台」が減少したことを説明する
	○現在の「食」を問う 「子ども食堂」について	・「子ども食堂」についての説明を聞き、それが増加している理由を考える	・統計資料を用いて、1990年代以降に格差・貧困問題が深刻化し、食事に困っている人々のために「食堂」をつくる動きが活発化していることを説明する
3 時間 目	「孤食」について	・家族で食事をする機会が減少していることや、一人で外食する機会が増えていることについて、自分の考えを整理する	・事前アンケートでも朝食・夕食を家族でとる人が少なかったことを紹介する
	○まとめ:数名の生徒に「孤食」についての考えを発表してもらう	・自分の考え方と対比しながら発表を聞く ・湯澤規子氏の「共在感覚」という考え方に触れる	・歴史的に考えると「孤食」は新しい現象であること、他者や社会、自然との繋がりを意識して「食」に向き合う感覚が薄らいでいることを確認する

の著作にヒントを得て取り入れた発問である³⁾。湯澤は、誰かに「おなかは減っていませんか」と気づかれる経験や、調理者や農業関係者あるいは自然界に向けて「いただきます」と発していることなどを例示しながら、一般的に個人が所有する臓器と捉えられている「胃袋」が他者や社会と繋がる経路として機能していることにも目を向けることの重要性を提起し、こうした他者・社会とともにある感覚が失われつつある点に、現在の日本社会における「食」をめぐる危機的状況を見いだしている⁴⁾。この2つの問いに対する生徒たちの回答は予想した通りであった。「胃袋」については「臓器」「身体の一部」といった回答があり、「食べること」に対しては「栄養」「カロリー」「幸せ」などの回答が出された。このように「個」に閉じた私的な行為として「食」を捉える反応が目立ったため、先述した湯澤の「いただきます」の解釈や「胃袋をつかむ」という慣用句を紹介しながら、「食」の社会的な側面についても考えるよう促すと、部活動で食事と一緒にとることによって一体感が得られた経験や、親戚が栽培した野菜を食べた経験などが出され、食することで「信頼」や「親密さ」などを得ているという意見や、「胃袋」を媒介にして他者との繋がっているという発言が得られた。

このような問答を経ながら「食」を問う視点を広げたうえで、「あなたの思い出のある食べ物について教えてください」と問い、忘れられない味や記憶に残っている食事、食に対するこだわりなどを簡潔なイラストと文章を添えて紙皿に記入する活動に取り組んだ。生徒は「亡くなった祖母が作ってくれた、ポテトサラダです。生前、作り方を教わり、今でも教え通りに自分で作ったりします。」、 「母と作るクリスマスケーキです。二人で果物を切って悩みながらクリームのうえにのせる作業など、とても楽しく幸せな時間です。」といった経験が綴られ、ほとんどの生徒が「食」を通じた他者との繋がりを記すことができていた。

最後に、他者や社会とのかかわりの中で「食」を捉えなおしたことの意味をそれぞれの言葉で整理させたうえで、冬休みの宿題として「食」に関する経験を保護者および祖父母、近所の年長者などにインタビューする活動を指示した。インタビューの項目は、①生年月日、②生活場所の変遷（時期と市町村名）、③記憶に残る小学校時代の給食・おやつ、④小学校時代の「ごちそう」、⑤小学校の頃の正月料理、⑥家族でよく行った外食先、⑦初めて食べたインスタント食品、⑧画期的だと思った調理家電とその理由、⑨父母から聞いた食の記憶（祖父母のみ）、⑩新しい「食・食材」の10項目である。各項目について、A：祖父母世代、B：父母世代、C：自分自身の記入欄を設けて、年明けにインタビューの結果を持ち寄るよう指示した⁵⁾。

冬休みを挟んで実施した2時間目は敗戦直後に焦点を定め、この時期の「食」をめぐる状況を祖父母への聞き取り調査の成果を交えながら学ぶことにした。まず授業の冒頭では、闇市と食料メーデーを題材にした動画⁶⁾を視聴し、ナレーションの内容を確認する作業に取り組んだ。そして、戦時動員や空襲などにより食糧生産・物流体制が崩壊するのみならず、「外地」からの復員・引揚により人口が急増していたことを把握していった。こうした動向を背景にして配給不足が常態化して闇市が自然発生的に形成されるとともに、人々の不満が募っていたことを確認した。そのうえで、現在の青森県は第一次産業が非常に盛んであることに触れつつ、本時の学習課題として「では敗戦直後の時期は青森県においても深刻な食糧難が生じていたのだろうか」という問いを提示した。

まず当時の青森県の食糧事情を探るために、東奥日報社の定期刊行物である『月刊東奥』（1939年発刊）の1945年10月号に掲載された巻頭言を取り上げた。「日本人を殺すな！」と題されたその巻頭言の記述内容を分析するなかで「勤労大衆は瀕死の危機」「青森県人を殺すな！」といった文言に注目し、青森県でも深刻な食糧難が生じていたことを把握していった。そして、この時期の『月刊東奥』では食糧不足に関する記事が繰り返し掲載されていたことを紹介した⁷⁾。また、現在の青森駅付近に闇市が形成され、青函連絡船で函館方面から運ばれる海産物などが売買されていたほか、青森から運ばれる米や果実が北海道の人々の貴重な食料になっていたことを伝えたほか、青森県にも「外地」からの人々の流入がみられ、特に樺太方面からの引揚者が多かったことを説明した。

次に『青森県史』（資料編 近現代6）に掲載されている「学校給食一〇年のあゆみ」を資料として提示し、当該期の青森県における給食事情を探った⁸⁾。生徒たちに重要だと思った箇所をチェックするように指示し、欠食児童への配慮として戦前期から開始された学校給食が戦時下の物資不足によって中断されたこと、敗戦後の深刻な栄養不足を改善する観点から再び学校給食のニーズが高まり、1954年に「学校給食法」が成立、全国的にはミルク・おかず・主食が配布される「完全給食」の整備が急速に整えられていったこと、一方で

青森県は学校給食の整備が著しく遅れ、1958年の時点で給食実施率が6.7%（全国最下位）で「完全給食」が16校、主食や弁当を家庭から持ち寄る「捕食給食」も13校に過ぎなかったことなどを読み取っていった。

このような青森県における敗戦直後の食糧事情を押さえたうえで、冬休みに実施した祖父母への聞き取りのなかから「小学校時代の給食」と「小学校時代のごちそう」という二つの質問項目についての回答を全体で共有していった。このうち「給食」については聞き取りに応じた祖父母世代のほとんどの方から「給食がなかった」という回答が得られたことを確認し、青森県では学校給食体制が遅れていたことが祖父母の経験からも裏付けることができた。他方、当時の「ごちそう」として「エビフライ」「カツ」などが挙げられたことについては納得する生徒の姿がみられたが、「白米」「おはぎ」「卵焼き」「鯨肉のカレーライス」などの回答には驚きの声があがっていた。一連の学習を踏まえ、最後に敗戦直後の食料事情を漢字一文字で表す活動に取り組み、祖父母世代の経験に触れて分かったことや驚いたこと、感じたことなどを現在との比較を軸にしながら整理して、2時間目の学習を終えた。まとめの記述には「昔はカレーのごちそうと聞いて、いつも僕たちが食べることができているということはとても幸せなんだと思った」、「今は当たり前で食べている白米が、昔は簡単に食べられなかったということを聞いて驚いた」といった反応が多く、現代の「豊かさ」が強く印象付けられている様子がみられた。

3時間目は高度経済成長期に焦点をあて、この時期に起きた「食」をめぐる変化を現在と関連づけながら学ぶことにした。まず、既習事項として高度経済成長期に普及した「三種の神器」（洗濯機・白黒テレビ・冷蔵庫）と「3C」（クーラー・カラーテレビ・車）を確認したうえで、冬休みの聞き取り調査で年長世代が挙げた「画期的な調理家電とその理由」を予想する活動を行った。祖父母世代からは冷蔵庫と炊飯器、父母世代からは電子レンジという回答が多かったことを紹介し、それぞれどのような点に画期性があったのかを推察させた。その際、それらの調理家電が普及する以前の状況や調理家電によって何が可能になったかを考えさせ、家事負担の軽減や調理時間の短縮化、調理の多様化などの意見を導いた。そのうえで、「なぜ高度経済成長期にこれらの調理家電が普及したのか、そして食のあり方はどのように変化したのか」という学習課題を設定した。そして、「現在の私たちの食生活はこの時期と連続しているのか、それとも断絶（変化）しているのか」と問いかけ、現在との関連性について考える視点を提示した。

展開部では、まず教科書を参照してこの時期に調理家電が普及したことに関連すると思う出来事を探す活動に取り組んだ。生徒たちからは多くの事項が挙げられたが、それらを「供給サイド」と「需要サイド」に分けて整理させた。そして、供給サイドに関わる事柄として科学技術の進展や労働システムの変化により耐久消費財の大量生産体制が整えられていったことを押さえ、需要サイドとして自営業が減りサラリーマンが増加して蓄財が進む一方、労働時間が増えていったこと、女性のなかにも働く人が増えるとともに核家族化がしたことで家事労働の負担軽減のニーズがあったことなどを押さえ、これらが相互に関連しあいながら調理家電の普及が進んだことを確認した。

次に、高度経済成長期の「食」の変化について教科書で扱われている事項を調べ、洋食化とコメ食の減少や冷凍食品・インスタント食品の普及、外食産業の登場などの動向を確認した。その際、冷凍食品・インスタント食品の開発・普及にとって重要な契機となった出来事は何かを問い、東京オリンピックと大阪万博という大規模な国際的イベントが開催されたことで、大量の「胃袋」を満たすための食糧提供システムの確立が求められたことを指摘し、交通網の整備なども相まって、規格化された大量の食事を生産・輸送・提供する動きが加速したことを説明した。他方で、高度経済成長期には農村から都市への人口流出が加速し、都市にはニュータウンや団地の造営が進み、核家族化のもとで「家族団らん」で食事をするスタイルが定着したことを説明した。

高度経済成長期の「食」の変化を以上のように押さえたうえで、「では、現在と連続（共通）していること、変化（断絶）していることは何だろうか」と問い、今日の食生活との関連についてグループで考えるよう促した。共通点については、冷凍食品の多様化やピザの宅配サービス、ファストフードのドライブスルーなどを挙げながら、食事に手間・暇をかけない簡便化が一段と進んでいるという意見が出された。変化してきている点としては、家族がそろって食事をする機会が減ってきているのではないか、という意見が出された。

そこで、改めて現在の食生活を考えることにし、現在の日本社会を象徴する現象として「子ども食堂」と「孤食」を提示した。このうち「子ども食堂」については、2012年にスタートしたとされ、貧困問題が深刻

化するなかで急増していることを統計とともに説明し、敗戦直後とは異なる形で十分な食事をとれない人々が生まれてきていること、そうした人々のための食堂がつくられているのは新しい現象であることを指摘した。また「孤食」については、事前アンケートでも家族そろって食事をする機会が少ない結果が示されたことを紹介し、現代社会は「家族団らん」を必要としない社会、あるいは「家族団らん」が難しい社会になっていることを指摘し、「孤食」に関する意見を求めた。

授業のまとめとして、数名の生徒に「孤食」に関する意見を発表してもらったのち、先述した湯澤規子による「共在感覚の喪失」という問題提起を紹介した。その著書『7袋のポテトチップス—食べるを語る、胃袋の戦後史—』（品文社、2019）の一部を引用する形で、自然環境や生産者、調理者、他者などとの繋がりを実感する機会が失われてきていること、たとえ一人で食事をしていても「繋がり」を実感することは可能であるという見方を紹介して授業を終えた。

4. 実践の成果と課題

本来、本実践は4時間扱いで構想し、高度経済成長期を扱う3時間目には学校が所在する平川市周辺の土地利用の変化や「減反」の影響、青森からの出稼ぎや集団就職なども扱い、「食」の生産現場で生じていた社会変化を捉えることも考えていた。また、4時間目には、「食」の歴史に関する一連の学習の成果を踏まえ、先述した「共在感覚の喪失」や「縁食」を丁寧に吟味しつつ、単元を貫く課題として設定した『「食」は望ましい方向に変化してきたか』という問いに対する回答を、自身の食生活やこれまで本校で学んできた「食」や「農」に関する学び、そして将来の仕事などに関連づけながら総括レポートとして整理する予定であった。

しかし、学期末試験や学校行事との兼ね合いから、やむを得ず3時間扱いに変更したことで窮屈な展開になってしまい、実践の成果・課題を検証するための材料となる総括レポートを作成する機会も逸してしまった。とはいえ、3時間の授業を進めるなかでみられた生徒たちの姿を通して、いくつかの成果と課題を感じることができた。以下では、感覚的な印象論の域を出ないが、生徒たちの学習の様子を手掛かりに今回の取り組みの成果と課題について述べてみたい。

まず、本実践では「レリバンス」をキーワードに据えて、特に「個人的レリバンス」という観点から生徒たちの生活に密着した「食」の教材化を進め、歴史（戦後史）への関心を高めることを目標の一つに設定した。生徒たちの関心を刺激するうえで「食」の教材化は有効であり、特に祖父母世代・親世代への聞き取り調査を組み入れたことで、「食」と「祖父母・親」という二重のレリバンスが働き、実生活に密着した具体的な学習を組織することができたのではないかと感じている。歴史学習への関心を高めたことに加え、思考の円滑化や歴史事象の具体的な理解という点でもレリバンスを重視したアプローチは有効に働いたように思われる。生徒たちは自らの食生活や食の記憶を足掛かりに学習対象に向き合うことができ、身近な存在である祖父母・親の経験を参照することで歴史的状況への理解が具体化され、現在との対比する思考が円滑に進んでいるように見受けられた。例えば、ある生徒は聞き取り調査の成果として、“よく行った外食先”として祖父（1938年生まれ）が「大連（中国）の三越デパート」、母（1968年生まれ）が弘前市土手町で営業していた百貨店「かくは宮川」、生徒自身（2004年生まれ）が「かっぱ寿司」を挙げたことを語り、世代によって大きな違いがあることに驚く様子を見せた。また、調理家電の学習場面においても、教科書で扱われている諸事項が身近にいる年長世代の経験と結びつくことで、単なる「記号」や「情報」としてではなく、生活感覚を伴った具体的な理解へと深められている様子がうかがえた。

他方、本実践では「食」を問う視点を豊富化させ、特に他者や社会との「繋がり」に対する敏感さを育み、その延長上に現在の食生活を批判的に捉えることを目指した。このうち「食」を考える視点を増やし、他者や社会との関わりを捉えることについては、1時間目で直接的に問題にしたことに加え、湯澤氏の見解を紹介したことで、かなり印象づけることができたのではないかと考える。

しかしながら、時間不足のために誘導的な展開となってしまい、「繋がり」に対する理解が表層的かつ観念的なレベルにとどまってしまい、実感や納得を伴うまでには深めることができなかったと感じている。また、現在の食生活を批判的に問うことについては、敗戦直後の深刻な食糧不足を扱った際に「現在は恵まれている」「現在の食生活は豊かになった」といった率直な反応を示す生徒が目立ったが、この点を深く掘り下げることのないまま学習を進めてしまった。

この点に関わる反省点の一つは、本実践では食糧生産に携わってきた人々の経験を参照する機会を組み込むことができなかったことである。特に高度経済成長期の産業構造の展開に伴う農村の疲弊や減反政策の影響などは青森県に関連の深いトピックであり、特に本校周辺で農業を営む方々の経験や本校の歴史と関連づけた学習ができたかもしれない。そうした観点から「生産する人」と「消費する人」の乖離を可視化することで、表層的・観念的な理解を乗り越えることができたのではないかと感じている。

また、「子ども食堂」の取り扱いについても、生徒たちのなかに形づけられた「現在は敗戦直後と比べて豊かになった」という素朴な認識を問い直す好機であったが、教師側からの「上からの説明」を軸に進めてしまった。多くの人々が貧しさと空腹に喘いでいた敗戦直後の状況と、社会全体の豊かさのなかで一部の人々が見えにくい形で空腹に喘いでいる現在の状況の違いを丁寧に捉えること、また「子ども食堂」が単に空腹を満たすだけのために存在しているのではなく、人と人との緩やかな関わりを提供していることにも目を向けることで、今日の「食」に関する認識をもう一段深めることができたのではないかと感じている⁹⁾。

4. まとめにかえて

以上、本稿では「食」を窓口にした戦後史学習の試みを検討し、「レリバンス」を重視した歴史学習のあり方について考究してきた。生徒たちの生活実践に密着した「食」を取り上げ、それを身近な年長世代の経験を手掛かりにしながら学ぶことで、「歴史」をより身近に、具体的に学ぶことができるのではないかという展望を得ることができた。

なお、本実践は「日本史A」での試みであったが、同科目は役割を終えてカリキュラムの表舞台からは姿を消し、高等学校の歴史教育は「歴史総合」「日本史探求」「世界史探求」からなる新しい体制への移行が進められている。このうち全ての高校生が学ぶのは「歴史総合」であり、実業系の高校では歴史系科目として「歴史総合」だけを設置する学校も少なくない¹⁰⁾。その意味で「レリバンス」を重要な要素に位置づけているこの新設科目の充実をいかに図っていくかが喫緊の課題として問われている。その際、今回の取り組みをそのままの形で「歴史総合」に移行することはできず、戦後日本の「食」をめぐる歴史的状況を新たに世界史的視野のなかで捉えなおす作業が求められてくるだろう。例えば、敗戦後の学校給食にも関係した「ララ物資」などの国際的支援や、かつて鶴見良行が『バナナと日本人—フィリピン農園と食卓のあいだ—』（岩波書店、1982年）で問うたような国境を越えた抑圧構造などを組み入れながら再構成していく必要性を感じている。また、「食」は「歴史総合」の近代史学習を考えるうえでもユニークな視座を提供する可能性を秘めており、藤原辰史『稲の大東亜共栄圏—帝国日本の＜緑の革命＞—』（吉川弘文館、2012年）で主題化されているような帝国主義と関連から「食」を問い、そこから現代の「食」のあり方を問い直すような授業も構想できよう。いずれにせよ「食」を「歴史総合」のなかでどのように取り扱うか、また「食」以外のテーマで祖父母・父母の経験を参照する学習を展開できないか、この点を中心に今後も授業開発に取り組んでいきたい。

【註】

- 1) 二井正浩編『レリバンスの視点からの歴史教育改革論—日・米・英・独の事例研究—』（風間書房、2022年）、二井編『レリバンスを構築する歴史授業の論理と実践—諸外国および日本の事例研究—』（風間書房、2023年）などの成果が提出されている。
- 2) 二井「『歴史総合』の新設とレリバンス論の必要性」前掲書、二井編、2022年所収。
- 3) 具体的には、湯澤規子『胃袋の近代—食と人びとの日常氏』（名古屋大学出版会、2018年）、『7袋のポテトチップス—食べるを語る、胃袋の戦後史—』（晶文社、2019年）、『食べものがたりのすすめ—「食」から広がるワークショップ入門—』（農山漁村文化協会、2022年）を参照した。
- 4) 湯澤はこうした状況を「共在感覚の喪失」という観点から問題化している。「共在感」は（1）先祖や神などの「生きているこの世とは異なる時空」、（2）生物や土や水、風などの「自然」、（3）村や家、地域などにおける人と人の関係、という3層から構成されているとし、これらとの共在感覚が失われ「孤食」が進んできた現状を「危機的で大きな転換点」と捉えている。前掲書、湯澤、2019年（特に、終章『胃

袋から見た現代』)。

- 5) なお、新型コロナウイルス感染症が流行していたことも関係して祖父母世代へのインタビューが思うように進まなかった生徒が多く、また長期間の休暇のため課題を忘れていた生徒も数名おり、結果的に聞き取り調査に取り組んで課題を提出できたのは20名であった。その際、祖父母世代は1950年代生まれが中心であり、一番の年長者は1937年生まれであった。父母世代は1970年代から1980年代半ば生まれが中心であった。戦時中・敗戦直後の状況を聞き取ることは、祖父母世代でも難しくなっていることがうかがえた。
- 6) 『NHKアーカイブス』の二つの動画を視聴した(ともに最終閲覧日は2024年1月10日)。
 - ・「6月18日 おにぎりの日 食物を求めてヤミ市へ」
(https://www2.nhk.or.jp/archives/kaisou/detail/?das_id=D0009100079_00000&category=today)
 - ・「食糧難突破に立ち上る民衆」(https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009181451_00000)
- 7) 尾崎名津子「敗戦直後の青森県内の言説状況―占領期の『月刊東奥』と石坂洋次郎の役割―」弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター『地域未来創生センタージャーナル』第7号, 2021年
- 8) 「学校給食―〇年のあゆみ」青森県教育委員会『教育広報 昭和33年12月号』(『青森県史 資料編6 近現代』599-601頁 所収)。
- 9) 例えば、藤原辰史は「孤食」でもなく、共同体による強い絆が発動する「共食」でもない、人と人の緩やかな関わりに支えられた「縁食」という概念を提起してこれからの「食」の進路を展望し、「子ども食堂」を「縁食」の象徴的な取り組みに位置づけている。詳しくは、藤原『縁食論―孤食と共食のあいだ―』(ミシマ社, 2020年)を参照されたい。
- 10) ちなみに、本校では新学習指導要領に対応した地理歴史科・公民科の科目編成として、第1学年で公民科「公共」、第2学年で地理歴史科「地理総合」、第3学年で地理歴史科「歴史総合」を履修するカリキュラム構成をとっている。